

「中高生の英語学習に関する実態調査2014」から見てくるもの(1)
——英語の指導と学習は授業の英語使用率とどう関係するか——

Findings from the Survey on the English Studies of Japanese
Lower and Upper Secondary School Students 2014 (1):
How are the Teaching and Learning of English Affected by the
Rate of Teachers' Use of English in the Classroom?

根岸雅史

Masashi NEGISHI

東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies

Abstract

A nationwide survey was conducted in order to investigate how lower and upper secondary school students in Japan are learning English inside and outside the classroom. 6,294 students participated in this survey. They answered a questionnaire regarding various aspects of English learning. This study focuses on the following aspects of this survey:

1. The rate of teachers' use of English in the classroom
2. The relationship between the rate of teachers' use of English and the types of activities in the classroom
3. The types of preparation and review conducted by students before and after the lesson
4. The relationship between the rate of teachers' use of English and the types of students' preparation and review of the lesson

The results show that about half the teachers use English in the classroom more than 50% of the time. The rates of English use are related to the types of activities set inside and outside the classroom. It was discovered that the more English was used in the classroom, the more productive skill activities, especially speaking activities, were observed. It will therefore be necessary to provide English teachers with combined training for the use of English in the classroom and its related language activities.

Keywords

Course of Study, Teachers' Use of English, Language Activities

1. はじめに

英語教育においては、これまで様々な政策提言がなされてきた。これらの政策提言は、

すべて最前線にある授業の改善に資するものでなければ意味がない。だからこそ、政策提言が授業の改善に実際にどのような変化をもたらしたのかを検証することは、きわめて重要だ。そして、その検証こそが、次の政策提言を妥当なものへと導くのである。

近年の英語教育政策で、大きな注目を浴びた政策提言の1つは、「高等学校学習指導要領(外国語)」(文部科学省, 2009a)における、「英語の授業は英語で行うことを基本とする」であろう。この政策提言は、賛成派・反対派の様々な議論を巻き起こしてきている。これらの議論は、英語の授業を英語で行うことの「実現可能性」を中心に「効果」「意義」などにまたがっている(森, 2013 ; Yamada, 2010 ; 山森, 2013)。

しかしながら、「英語の授業は英語で」に関して、「高等学校学習指導要領解説 外国語編英語編」(文部科学省, 2009b)には、『授業は英語で行うことを基本とする』こととは、教師が授業を英語で行うとともに、生徒も授業の中でできるだけ多く英語を使用することにより、英語による言語活動を行うことを授業の中心とすることである。』という重要な指摘があることを見逃してはならない。このように、「教師の英語使用」は「英語による言語活動」と結びつけて語られているのだ。しかし、この問題を巡っての議論では、「教師の英語使用」だけが一人歩きしていることが少なくない。「英語の授業は英語で」の政策評価を行うには、その実施率を知るだけでなく、その実施率と言語活動の関係がどうなっているかを知る必要がある。その言語活動の実態把握は、授業内の英語による言語活動のみならず、それ以外の学習活動および学校外での学習(とりわけ、予習・復習)などの視点から、多面的に行わなければならない。

英語教育の現場で何が起きているかを正確に把握した上で、政策を立案することは重要なことではあるが、その実態把握は容易なことではない。授業のように日々広範囲に展開している「イベント」の実態を把握するには、そこに関わるあらゆるものから情報を得ることが重要である。英語教育の研究大会における公開授業は実際の授業ではあるが、「選ばれし英語教師」による、「練りに練られた授業」である。その一方で、国や教育委員会や研究機関などが行っている調査は、代表性は高いが、本人の申告に基づくものであり、実態そのものではない。授業の実態のように実はとらえがたい対象は、そこに関わるあらゆる情報源からの調査が必要である。そうした実態把握をしなければ、教育政策は、その決定に関わる者たちの信念の具現化に過ぎなくなってしまう。

では、これまでの調査では、英語授業での英語の使用実態はどのように把握されているのであろうか。平成26年度「英語教育実施状況調査」では、「授業における、英語担当教師の英語の使用状況」を調べているが、そこでは、授業の50%以上を英語で行っている教師比率は、中学では5割程度、高校(「コミュニケーション英語Ⅰ,Ⅱ」および「英語表現Ⅰ,Ⅱ」)では4~5割となっている(文部科学省, 2015a)。これに対して、高等学校を対象とした「平成26年度英語教育改善のための英語力調査」では、旧課程の高校3年の「英語Ⅱ」の授業で、50%以上を英語で行っている教員は、15%前後とされている(文部科学省, 2015b)。「平成22年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査」(文部科学省, 2010)でも、同じく旧課程の「英語Ⅰ」では15%程度であった(「オーラルコミュニケーションⅠ」は50%程度)ことから、「授業は英語で行うことを基本とする」が盛り込まれた「高等学校学習指導要領(外国語)」(文部科学省, 2009)の施行前後で大きな変化が起きている

ということかもしれない。

これに対して、言語活動の実施状況はどうであろうか。平成26年度「英語教育実施状況調査」では、言語活動時間の比率を調べているが、それによると、半分以上の時間を言語活動に割いているのは、中学は50～60%程度、高校は40%前後となっている(文部科学省、2015a)。「平成26年度英語教育改善のための英語力調査」では、言語活動の時間ではなく、具体的な言語活動の有無を尋ねている。それによれば、受容技能に関する言語活動のほとんどは70～90%が実施しているのに対して、発表技能に関する言語活動のほとんどは10～30%の実施率となっている。とりわけ、ディベートやディスカッションをしている教師は、6.9%ときわめて限定的である(文部科学省、2015b)。

ただし、これらの調査でも、教師の英語使用と言語活動の関係は明らかにされていない。また、これらはいずれも教師に対するアンケートに基づくものであり、教師側の「報告」の結果である。したがって、実態把握を行うには、そこに関わる様々な情報源から多面的にアプローチする必要がある。

2. 研究

(1) 研究設問

1. 中高の英語教師の授業中の英語使用率を生徒はどのように認識しているか。
2. 中高の英語教師の英語使用率と授業中の活動はどのような関係にあるか。
3. 中高生の英語授業の予習・復習の実態はどうなっているか。
4. 中高生の英語授業の予習・復習と教師の英語使用率の関係はどうなっているか。

(2) 調査方法および調査対象者

ベネッセ教育総合研究所の「中高生の英語学習に関する実態調査2014」は、2014年3月に実施された郵送法による自記式質問紙調査である。

調査依頼は、2つの方法で実施した。第1に、東京大学・社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所の共同研究「子どもの生活と学び」プロジェクトの調査モニター4,021名に質問紙を配布した。モニターの回収率は79.2%であった。また、非モニター14,800名にも質問紙を配布した。回収率は21.0%であった。中学1年生から高校3年生まで計6,294名の有効回答数を得た(中学1年生1,057名、中学2年生1,028名、中学3年生996名、高校1年生931名、高校2年生790名、高校3年生1,433名、学年不明59名)。

分析にあたっては、学校段階別の比較の精度を高めるため、全国の学年別生徒構成比(文部科学省「学校基本調査」参照)および進研ゼミ会員・非会員比が実際と等しくなるようにウェイトの設定を行った。以下、調査結果は、データにウェイトの設定をして集計したものである。

(3) 調査内容

調査全体の内容は、以下の通りである。

- ・中学校入学前の英語学習について(幼少期の英語体験・学び、小学校英語・小学

校時の学校外学習の役立ち感)

- ・現在の英語学習について(授業の理解度, 授業における活動内容, 教師の授業での英語使用, 授業以外の学習時間, 学校外学習, 習い事, 学校の授業の予習・復習)
- ・英語学習に対する意識について(英語の好き・嫌い, つまずき, 英語の学習観)
- ・英語に関する意識や関わりについて(外国や英語との関わり, 自主的に英語に触れる活動, 英語の必要性, 将来の英語使用に関する意識)

具体的な調査票については, ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開されている(ベネッセ教育総合研究所, 2014)。

なお, 本論文では, この調査のうち, 上記の研究設問に関わる項目の結果に焦点を置いて論じる。

(4) 結果

図1は, 教師の授業での英語使用率を表している。「ほとんど英語で授業している」という回答は, どの学年も5%前後である。また, 「70%くらい」と「ほとんど英語で授業している」を合わせると, 中1~高1では20~25%程度となるが, 高2, 高3では15%前後に落ち込む。これは, 高2, 高3と「ほとんど使っていない」率が上昇することとも連動している。半分以上英語で授業しているのは, 中1~高3で5割から6割程度となる。

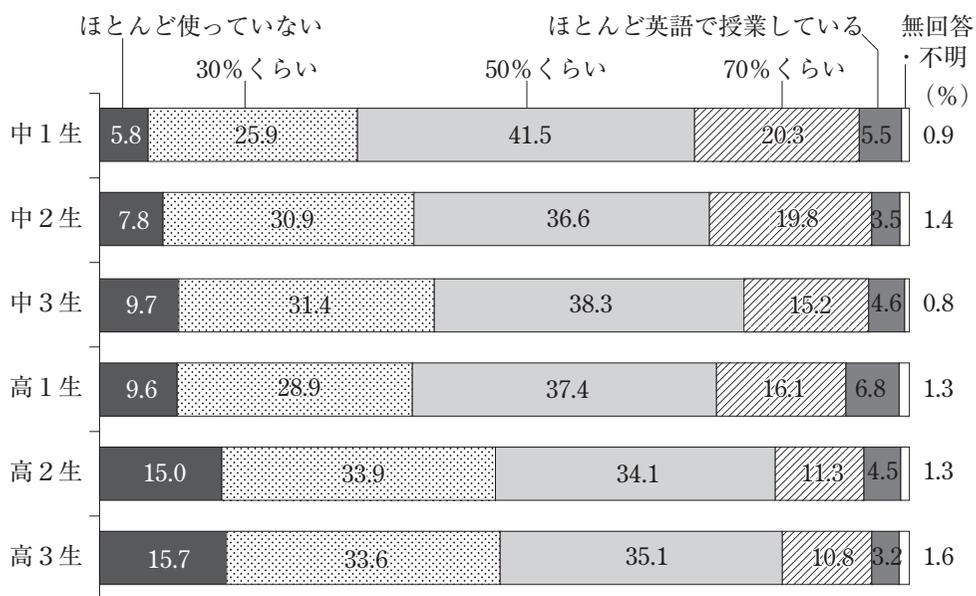


図1 教師の英語使用率

図2は, 中学校における, 授業中の活動と教師の英語使用率の関係を示している。「単語の意味や英文のしくみについて先生の説明を聞く」「英文を日本語に訳す」「単語や英文を読んだり書いたりして覚える」「文法の問題を解く」という活動は, 英語使用率に関係なく行われている。つまり, これらの活動はどのような授業でも行われているということだ。これに

対して、「自分の気持ちや考えを英語で書く」「自分の気持ちや考えを英語で話す」という活動は、教師の英語使用率が多いほどよく行われていることがわかる。

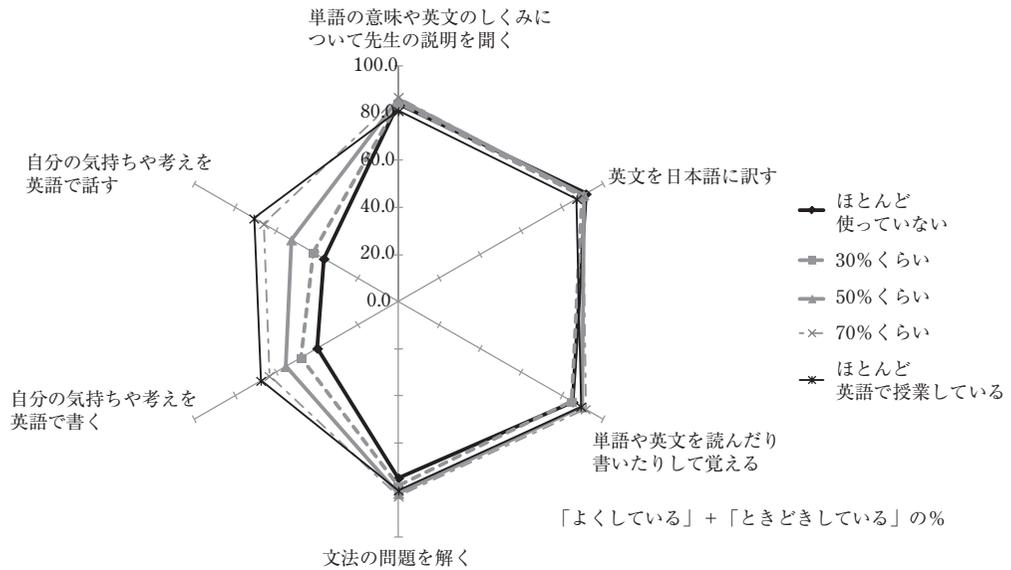


図2 中学校における、授業中の活動と教師の英語使用率

図3は、高等学校における授業中の活動と教師の英語使用率の関係を示しているが、こちらも中学校のそれとほぼ同様の傾向にある。高等学校でより特徴的なのは、「自分の気持ちや考えを英語で書く」「自分の気持ちや考えを英語で話す」という活動の有無がより明確に教師の英語使用率と連動しているということである。高等学校の英語授業においては、教師の英語使用率が低ければ、生徒の産出系の活動はほとんど行われていないということになる。

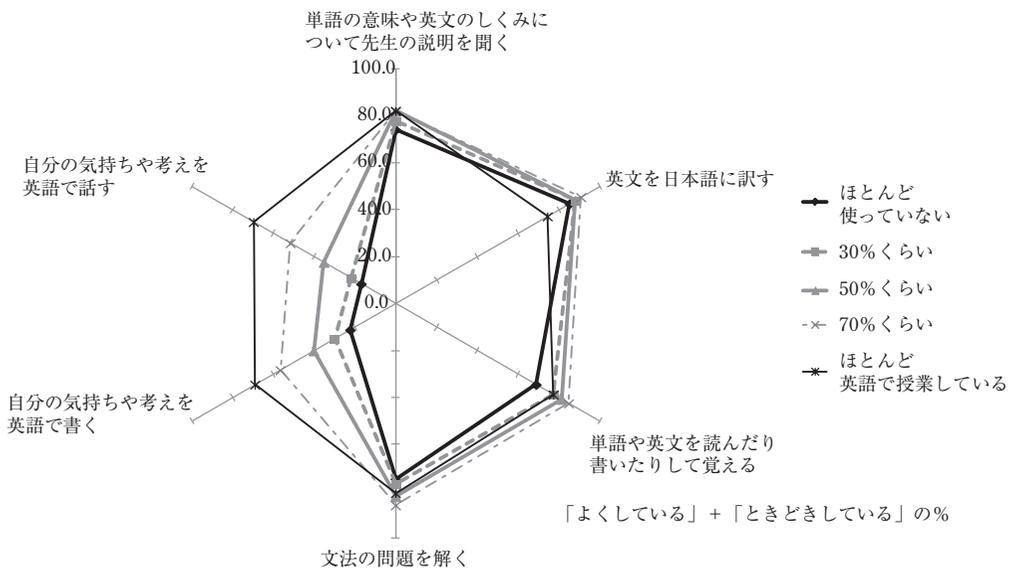


図3 高等学校における、授業中の活動と教師の英語使用率

図4は、「自分の気持ちや考えを英語で書く」活動と教師の英語使用率の学年ごとの関係を示している。全体としては、「自分の気持ちや考えを英語で書く」活動の有無は、教師の英語使用率と連動していることがわかる。この傾向は高等学校では特に顕著であるが、中学校ではややゆるやかな傾向となっている。つまり、中学ではそれほど教師の英語の使用率が高くなくても、「自分の気持ちや考えを英語で書く」活動が行われていることがわかる。また、中2のこの活動の実施率が、それぞれの英語使用率の中では高い傾向にある。

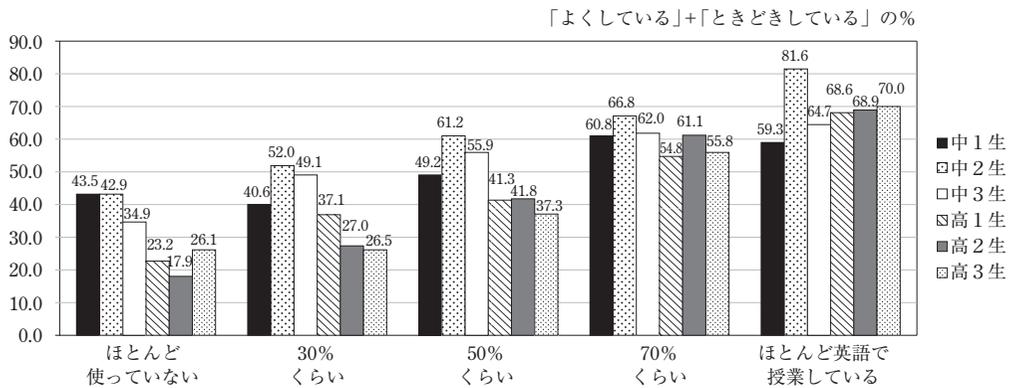


図4 「自分の気持ちや考えを英語で書く」活動と教師の英語使用率の学年ごとの関係

図5は、「自分の気持ちや考えを英語で話す」活動と教師の英語使用率の学年ごとの関係を示している。全体としては、「自分の気持ちや考えを英語で話す」活動の有無は、「自分の気持ちや考えを英語で書く」活動と同様、教師の英語使用率と連動していることがわかるが、その傾向はより強い。つまり、教師の英語の使用率と生徒の「自分の気持ちや考えを英語で話す」活動にはとりわけ強い関係があるということだ。高等学校では、学年進行とともに、実施率が下がる傾向にあるが、「ほとんど英語で授業している」では、3年間の変化がほとんどない。

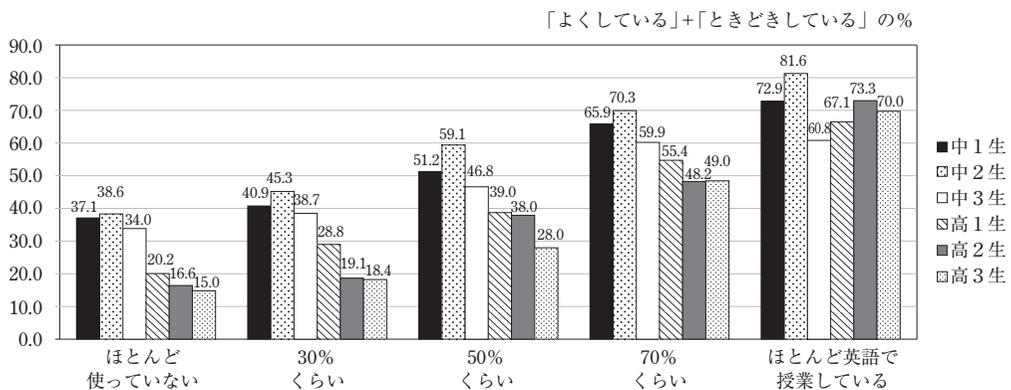


図5 「自分の気持ちや考えを英語で話す」活動と教師の英語使用率の学年ごとの関係

図6は、中高生の平日と休日の英語学習時間を示している。これは、「平日(学校がある日)、学校での授業以外に一日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾、家庭教師について勉強する時間も含めてください。」という問いに続く質問のうち「英語の勉強をする時間はどれくらいですか。」についての回答をまとめたものである。休日についても同じようにたずねたものの回答をまとめている。中学では、平日は5分の1の生徒が、休日は4分の1の生徒が「ほとんどしない」と答えている。高校になるとこの比率はさらに上がり、平日も休日も約3分の1の生徒が「ほとんどしない」と答えている。ボリュームゾーンは30分から1時間くらいで、半数前後がこの時間を選んでいる。

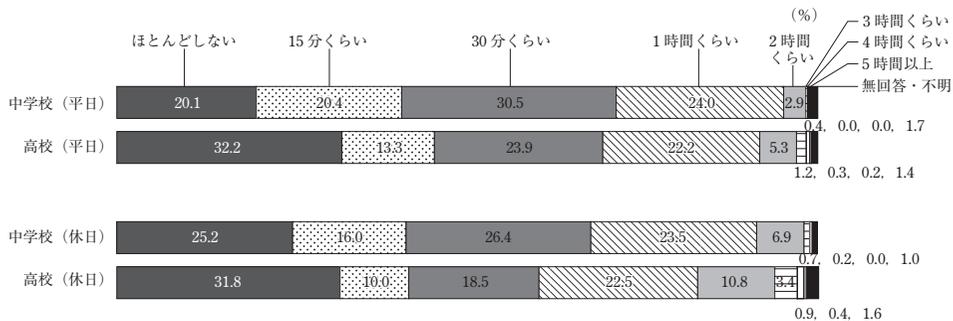


図6 中高生の授業以外の英語学習時間

中高生の授業以外の学習時間は決して多いとは言えないが、その中身はどうなっているのだろうか。図7は、予習内容を表している。予習のトップ3は、中高ともに、「単語の意味を調べる」「教科書本文をノートに写す」「教科書本文を和訳する」となっている。「スピーチやプレゼンなどの発表の練習をする」「授業の内容に関連したことを調べる」「英語で意見や感想を書く」

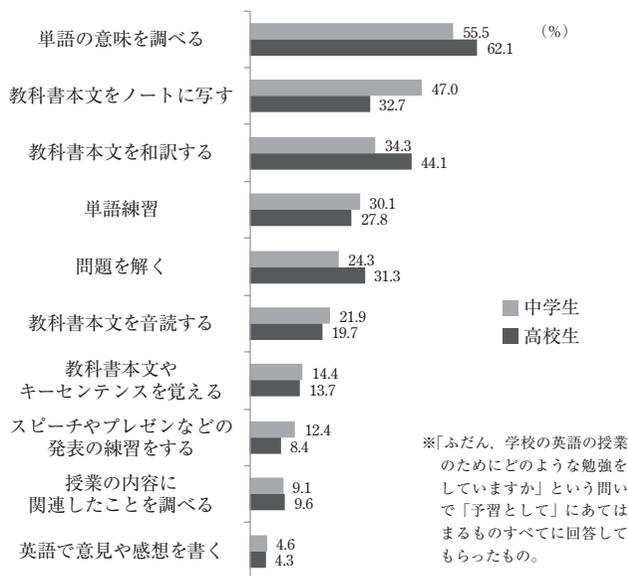


図7 学校の授業のための学習(予習)

感想を書く」というような学習は、中高ともにあまり行われていない。

図8は、復習内容を表している。復習のトップ3は、中高ともに、「問題を解く」「単語練習」「教科書本文やキーセンテンスを覚える」となっている。「授業の内容に関連したことを調べる」「英語で意見や感想を書く」「スピーチやプレゼンなどの発表の練習をする」というような学習は、予習と同様、中高ともにあまり行われていない。

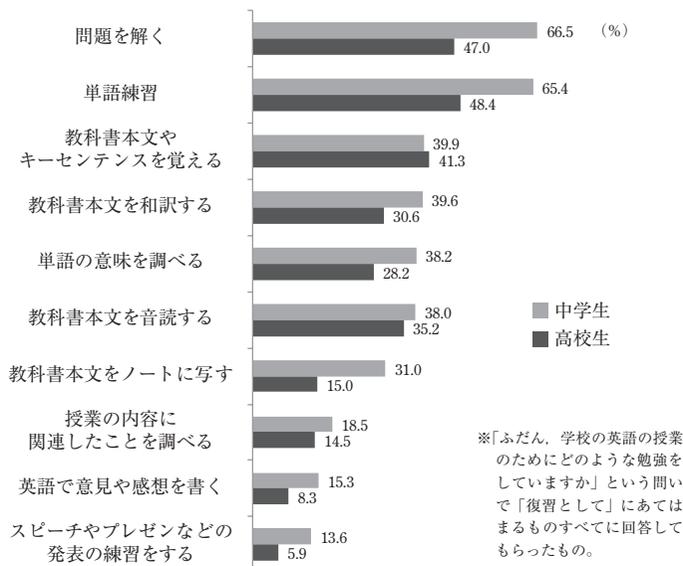


図8 学校の授業のための学習(復習)

図9は、予習の内容と教師の英語使用率の関係を示している。一般に、教師の英語使用率が高いほど、予習での学習比率が高い傾向にあるが、とりわけ「スピーチやプレゼンなどの発表の練習をする」という予習は、教師の英語使用率との関係が顕著である。

図10は、復習の内容と教師の英語使用率の関係を示している。予習同様、教師の英語使用率が高いほど、復習での学習比率が高い傾向にあるが、とりわけ「英語で意見や感想を書く」「スピーチやプレゼンなどの発表の練習をする」という復習は、教師の英語使用率との関係が顕著である。

3. 考察

「高等学校学習指導要領(外国語)」(文部科学省, 2009a)は、英語の指導方法に関して、教師に大きな変更を迫ったと言えるだろう。「授業を英語で行うこと」は、多くの教師にとっては、訳読式授業からの移行を意味し、その移行は容易なことではないだろう。

本調査の教師の英語使用率は、平成26年度「英語教育実施状況調査」とほぼ同様の傾向ではあるが、生徒の印象の方が教師の自己申告よりもやや高くなっている。高等学校などは、様々な科目があり、生徒の印象がどの科目から来ているのかはわからないが、生徒は教師の英語使用率を高め感じている可能性があり、これは興味深い。いずれにしても、

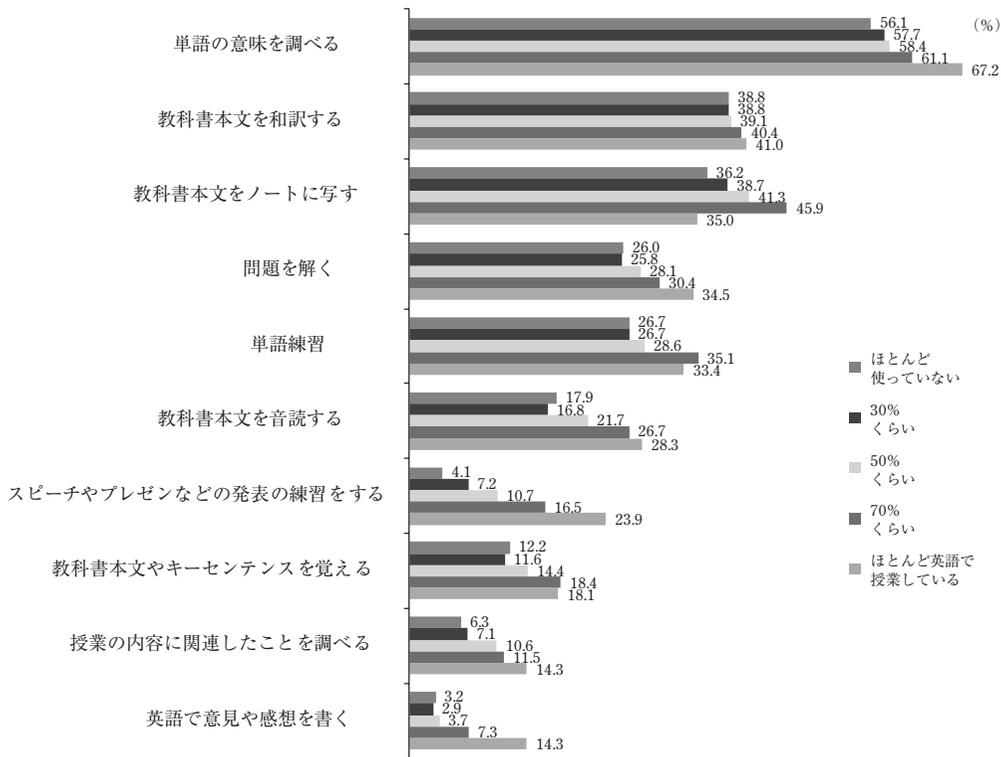


図9 学校の授業のための学習(予習)と教師の英語使用率

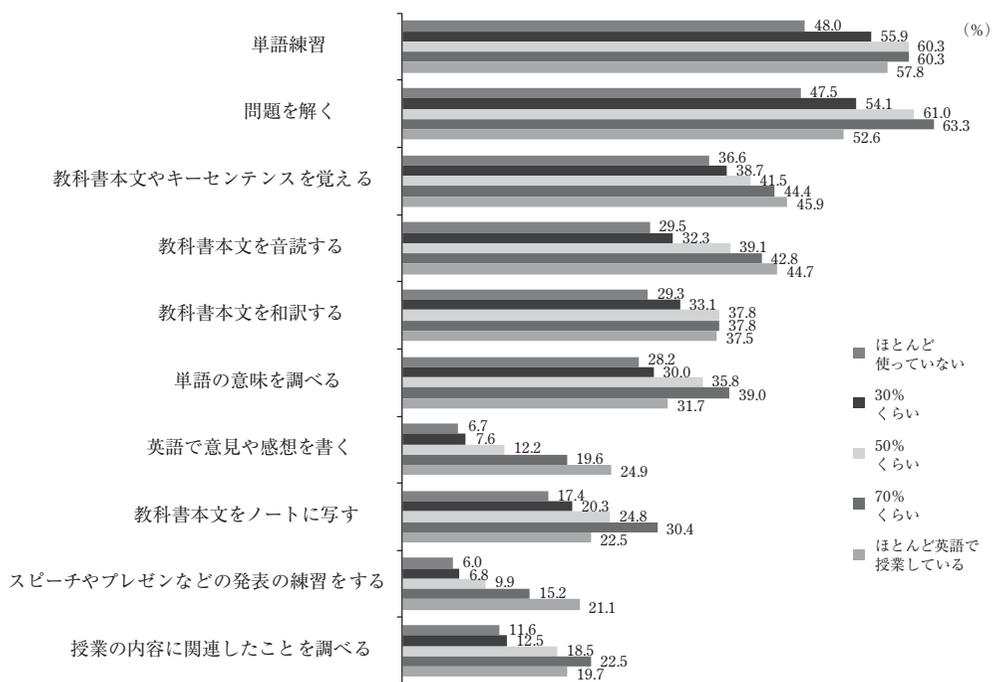


図10 学校の授業のための学習(復習)と教師の英語使用率

旧課程の「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」の授業では、50%以上英語で行っている教員は15%前後だったことからすると、教師の英語使用率は大きく上昇していると言えそうだ。この変化は、「高等学校学習指導要領(外国語)」(文部科学省、2009a)に、「英語の授業は英語で行うことを基本とする」という文言が入ったことやそれに伴う様々な教員研修が実施されたことの影響を示唆している。

現段階では、中学校の学習指導要領には、「英語の授業は英語で」という記述はない。にもかかわらず、中学校の英語使用率の方がむしろ高いのは興味深い。これは、英語で行う言語活動に対して、中学校の英語教師の方が馴染んでいることから来るのであろう。また、それぞれの校種においても、下の学年ほど、教師の英語使用率は高く、英語のレベルが上がるにつれ、「英語での授業」の実現が難しくなっていることがわかる。中高それぞれの最上学年で教師の英語使用率が特に低いことは、受験対策と関係しているとも考えられる。

さて、問題は、教師の英語の使用率が、どのような教室内の活動や家庭学習と結びついているのかである。

今回、教師の英語の使用率と教室内の活動や家庭学習との関係で明らかになったことは、「単語の意味や英文のしくみについて先生の説明を聞く」「英文を日本語に訳す」「単語や英文を読んだり書いたりして覚える」「文法の問題を解く」という活動は、英語使用率に関係なくどのような授業でも行われていることだ。ほとんどの英語教師は、授業のやり方に関係なく、こうした活動を取り入れているということがわかる。よく考えてみれば、ほとんど授業を英語でやっているのに、「英文を日本語に訳す」や「単語の意味や英文のしくみについて先生の(日本語で行われていると思われる)説明を聞く」というのは、矛盾しているように思われる。しかしながら、今回の調査では、これらの教室内活動の頻度や比率を聞いているわけではないので、このような結果になるのかもしれない。ほぼすべて英語でやっているような授業であっても、要所要所で、日本語に訳したり、日本語で説明したりすることがあるということなのだろう。

これに対して、「自分の気持ちや考えを英語で書く」「自分の気持ちや考えを英語で話す」という活動は、教師の英語使用率に比例して増えている。理論上は、教師自身は英語を使わなくても、生徒に英語を使う活動を行わせることは可能ではあるが、実際は、授業で英語の産出をたくさん行っている教師ほど、生徒の産出の機会が多いというのは、興味深い。教師の言語習得に関する信念が、指導の在り方に反映しているのかもしれない。

次に、授業での英語使用率と家庭学習の関係について見てみる。そもそも、英語の家庭学習がほとんどないという高校生が、平日も休日も3分の1というのは、驚きであるのだが、ここでは家庭学習を行っている生徒の学習の中身について見ていく。予習・復習の傾向は、中高ともに似た傾向にあることがわかる。予習のトップ3は、どちらも「単語の意味を調べる」「教科書本文をノートに写す」「教科書本文を和訳する」、復習のトップ3は、同じくどちらも「問題を解く」「単語練習」「教科書本文やキーセンテンスを覚える」となっている。英語での英語授業がある程度浸透しつつある中で、予習・復習の中身が十年一日のごとく変わっていないということを示唆している。予習・復習の内容が授業と合っていないということは、「授業の内容に関連したことを調べる」「スピーチやプレゼンなどの発表の練習をする」「英語で

意見や感想を書く」という学習が、予習でも復習でもあまり行われていないことから明らかである。ただし、これらの学習の有無は、授業での英語使用率の高さに対応しており、英語で授業を行う教師の中には、それに対応した予習・復習を課している教師が一定数いるということがわかる。

英語の授業を英語で行うかどうかというのは1つの現象であるが、この1つの現象は授業中の活動の在り方というもう1つの現象と連動している。英語の使用率は、産出系の言語活動の有無と密接に結びついている。しかし、予習・復習の在り方との結びつきは、まだ十分ではない。それは、英語で行う授業への転換は図ったものの、それを支える周辺の学習の転換が図られていないということを示唆している。英語で行う言語活動を中心とした授業において、どのような予習・復習が求められるのかについて、今後の研究が求められる。

4. 結論

教室での英語使用率が半分以上の教師は5～6割程度であるということが、中高生への調査でも確認された。教師の教室での英語の使用率は、言語活動・学習活動といった「教室内活動」や予習・復習といった「教室外学習」と関連し、とりわけ、産出系の言語活動や予習・復習との関連が強い。このことから、単に授業での教師の英語の使用率を高めることを目指した研修ではなく、言語活動の在り方や家庭学習の在り方と併せての教員研修が重要であることがわかる。

ただし、今回の調査の限界もある。「ほとんど英語で授業している」という回答者にも、「英文を日本語に訳す」という活動が他の回答者と同程度あったのは、自分の担当の英語教師は「ほとんど英語で授業をしながらも、ポイントを絞って日本語に訳す」と判断した回答者がかなりいたためと考えられる。今後の調査では、言語活動や学習活動の頻度や量を尋ねることで、英語の使用率と言語活動のより正確な関係が見えてくるであろう。そうした現状把握がなされた上で、真に妥当な政策提言がなされ、授業の更なる改善が図られることを期待する。

参考文献

Yamada, H. (2010). Teaching/learning English in English at Japanese senior high schools: The debate. *Jin-ai Daigaku Kenkyu Kiyō*, 9, 43-53.

ベネッセ教育総合研究所 2014. 「中高生の英語学習に関する実態調査2014」

Available: <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356>

[2015年10月]

森一生 2013. 『英語の授業は英語で』は本当に可能か』『中部地区英語教育学会紀要』42, pp. 45-52.

山森直人 2013. 「高等学校英語科授業における教師の英語使用に関する調査」『鳴門教育大学研究紀要』28, pp. 49-63.

文部科学省 2009a. 「高等学校学習指導要領(外国語)」

Available: http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf [2015年10月]

文部科学省 2009b. 「高等学校学習指導要領解説 外国語編英語編」

Available: http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf [2015年10月]

文部科学省 2010. 「平成22年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」

Available: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1301650.htm
[2015年10月]

文部科学省 2015a. 「平成26年度『英語教育実施状況調査の結果について』」

Available: http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358566.htm
[2015年10月]

文部科学省 2015b. 『平成26年度英語教育改善のための英語力調査事業報告書』

Available: http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/05/26/1358071_03_2.pdf [2015年10月]